

はじめに

富山県内の2遺跡から出土した「病院」銘入り陶器瓶の意義について、筆者は平成27年5月の日本考古学協会第81回総会の研究発表にて紹介した(鹿島2015)。本稿では、その後新たに確認できた資料の調査成果を踏まえ、この陶器瓶の意義について改めて考察を行う。

1 「病院」銘入り陶器瓶の概要

富山城下町遺跡からは、これまでにA～Cの3地点から5点の「病院」銘入り陶器瓶の出土を確認した(表1)。

小矢部市五社遺跡からは越中丸山焼製とされる徳利が1点出土した報告がある(写真1の左・富山県文化振興財団1998)。

一方、平成27年7月に開催された越中小杉焼友の会にて、個人蔵の「病院」銘および「長谷川福光分病院」銘入りの陶器瓶を実見する機会を得た。富山城下町遺跡出土陶器瓶と比較検討した(写真2)。以下、各々の出土地点とその特徴をみていく。

(1) 富山城下町遺跡

A 地点【2008b】

プレミスト総曲輪マンションが建つ地区で、富山城下町の武家地と町人地の間の「背割下水」に廃棄された近世以降の大量の陶磁器類の中から出土した。

A1は灰釉地の上に長石釉で「病院」の文字を重ね掛けしたものである。いわゆるイッチンの技法で文字が描かれる。同地区からは、この他に破片1点がある。類品としてA地点から「高村薬口」(口は房か局と推測される)の銘がある陶器瓶片を新たに確認した。

B 地点【2014d】

富山城外堀の埋め土から「病院」銘の陶器瓶が2点出土した。この外堀は明治20年代半ばまでには埋め立てられている。

B1はA1より艶のある灰釉地にやや崩して「病院」の文字を記す。この他に1点「病」の文字がみえる破片が1点ある。

C 地点【2013c】



図1 陶器瓶出土遺跡位置図



写真1 遺跡出土陶器瓶
(富山県埋蔵文化財センターにて)

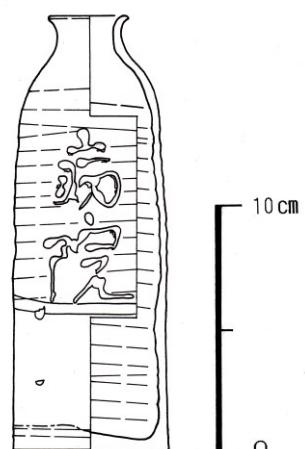


図2 A1 陶器瓶実測図

背割下水から「院」の文字の一部が書かれた陶片が出土した。

(2) 小矢部市五社遺跡

発掘調査報告書では、越中丸山焼製とされる徳利に「病院」(やや字体が崩れた表記)銘が施された「薬瓶」が出土している(写真1)。

(3) 個人蔵

E1はこれまで確認した中で最大の高さ19cmを測る。『富山県陶磁器思考(1)』には、小杉焼四代陶山三十郎作と紹介されている(尾山2004)。病から院の字へ長石釉が繋がる筆体がD1の筆体に極めて良く似ている。

E2は唯一、外面が褐色の鉄釉を施す。「長谷川福光分病院」の銘を長石釉で記す。



写真2 個人蔵の陶器瓶(左2点)と富山城下町遺跡の陶器瓶(平成27年7月26日 越中小杉焼友の会にて)

遺跡名・地点	番号	規格(cm)			銘	備考
		口径	底径	器高(残存)		
富山城下町遺跡 A 地点	A1	3.0	6.0	17.5	病院	2010『富山城跡発掘調査報告書』 総曲輪四丁目・旅籠町地区優良建築物等整備
	A2	—	—	(7.2)	(病)院	
	A3	—	—	(6.2)	高村藻(房・局?)	
富山城下町遺跡 B 地点	B1	3.0	6.3	16.3	病院	2014d 旧総曲輪小学校跡地(第1期)
	B2	—	—	(6.4)	病(院)	
富山城下町遺跡 C 地点	C1	—	—	(5.0)	(病)院	2014『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』 一番町共同ビル(仮称)新築工事
五社遺跡	D1	—	6.6	(15.0)	病院	1998『五社遺跡発掘調査報告』
個人蔵	E1	3.0	6.7	19.0	病院	尾山2004 越中小杉焼友の会にて実見
	E2	3.0	6.0	15.7	長谷川福光分病院	

表1 陶器瓶観察表

2 富山県初期の「病院」の動向について

(1) 富山病院

北陸では明治3(1870)年に加賀藩立医学館(現金沢大学附属病院)、福井藩立魁病院が開設される(福永2014)。医学館は黒川良安(新川郡生まれ、長崎で蘭方医学を学び金沢で開業)が藩命で開設する。明治8(1875)年医学館が石川県に移管され、石川県病院となる。明治9年には新川県が石川県に編入されるが、富山から病院誘致の陳情が相次いだ。

富山県内に初めて開設された「病院」は、明治9年10月に富山市千石町にあった加藤貞知邸に「公立金沢病院富山分院」として仮設置される(『富山高岡沿革志』)。この加藤邸には、上新川郡役所や連隊区司令部なども仮設された。

その場所は、図4の富山市立図書館所蔵の地籍図を現在の地図と対比すると、千石町2丁目と同4丁目にまたがる一角に比定でき、近代富山の「病院」発祥の地が明らかになった。

その翌年11月、「石川県富山病院」と改称し、惣曲輪、現在の大手町(富山市民プラザ)に新築移転する(図3)。明治13年、富山病院内に「医学所」(現金沢大学医学部の前身)が設置される。同16年、富山県が誕生し、「富山県富山病院」と改称された同21(1888)年、

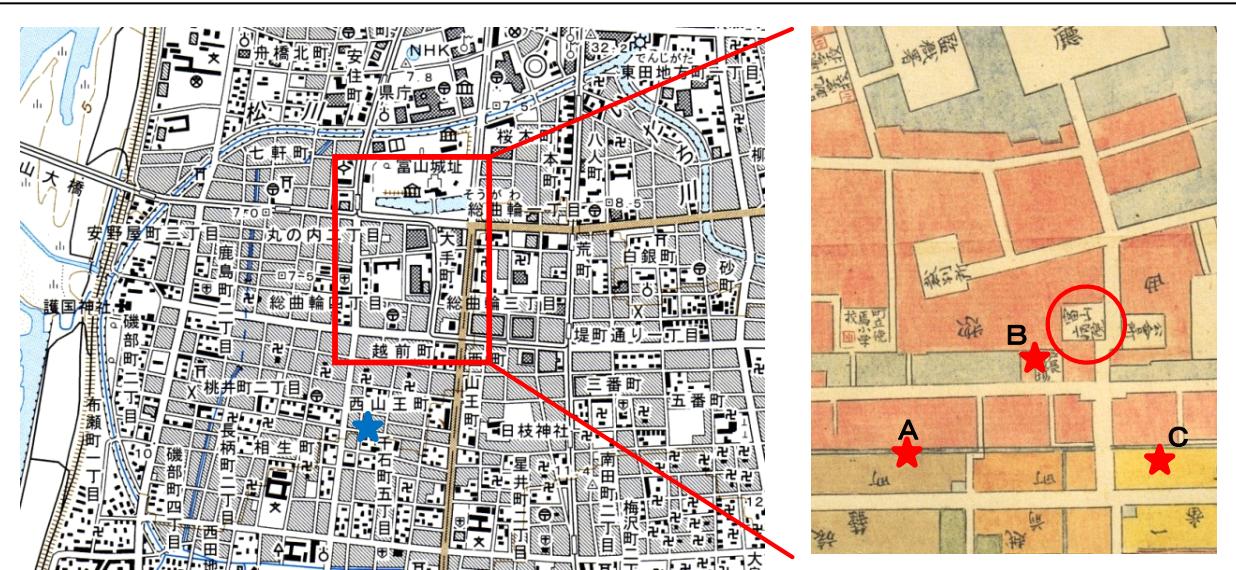


図3 富山病院の位置（丸印）と富山城下町遺跡の陶器瓶出土地点（★A～C地点）

左：平成 22 年、1 : 25,000 地形図（国土地理院）★は千石町加藤貞知邸跡

右：明治 18 年、富山市街見取全図（富山市郷土博物館蔵）

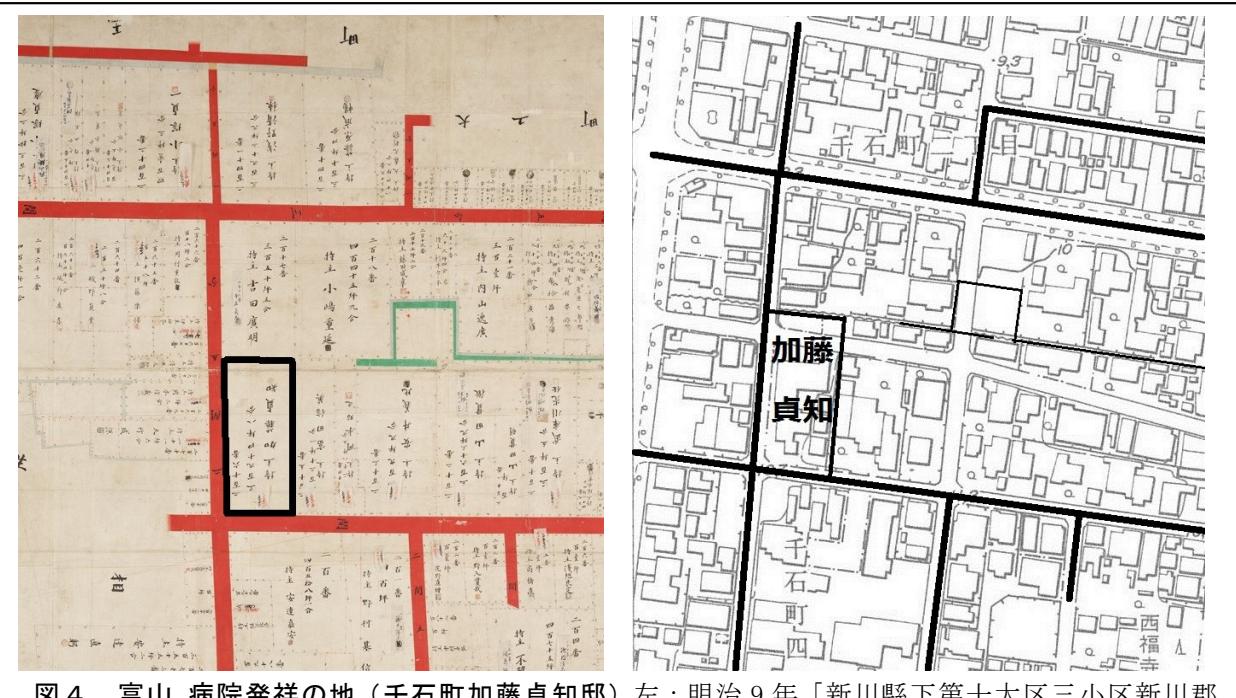


図4 富山 病院発祥の地（千石町加藤貞知邸）左：明治 9 年「新川縣下第十大区三小区新川郡富山千石町」（富山市立図書館蔵）右：平成 7 年「富山市基本図 VII-HE41-3」より（富山市）

県立から公立となり、「上新川郡立富山病院」となる。同 22 年、「上新川郡立富山病院」が「新婦富山病院」と改称し、新川郡と婦負郡の二郡立となる。同 24 年には、「新婦病院富山市立病院」となる。同 32 年までは、市内唯一の総合病院であったが、同年の市内大火で焼失する。同 40 年には日本赤十字社富山支部病院が開設される（水間 1979）。

A 1 は、「富山病院」から南西に約 150m と近接した場所から出土、B 1・2 はさらに近接した位置から出土した（図3）。このことから「病院」銘の陶器瓶は、明治 10 年に移転新築された「石川県富山病院」あるいは B 地点で出土した外堀が明治 20 年頃までに埋められていることから明治 16 年からの「富山県富山病院」で使用されていた可能性が極めて高い。

（2）長谷川福光分病院

一方、五社遺跡のある県西部では、伏木町（現・高岡市）に明治 14 年、県内最初の私立病

院である長谷川病院が創立する。同 18 年に今石動町（現・小矢部市）に石動病院、同 22 年には津沢町（現・小矢部市）に津沢病院が開設された（『小矢部市史』）。五社遺跡で出土した陶器瓶は、これらの病院に近接しているわけではない。

E 2 の陶器瓶に表記された「長谷川福光分病院」は伏木町に本院のある長谷川病院の分院で、『福光町史』によると明治 17 年に「長谷川病院福光分院」ができ、「血清」という療法を用いて内・外科の治療を行ったと紹介されている。この「長谷川病院福光分院」が陶器瓶に表記された「長谷川病院福光分院」で、同院にて使用するために製作されたと推測される。他の出土品などと異なり、外面に褐色の鉄釉が施され、器高も小振りである。

（3）高村薬（房・局）（写真 3）

A 地点から出土した「高村薬口カ」（□は房・局か）について、病院ではないものの、同じ灰釉を施す陶器瓶に長石釉にて文字が記されていることから、「病院」銘入り陶器瓶と同類の製品と判断した。大正 14 年『大日本職業別明細図之内富山市』（富山市郷土博物館蔵）の絵図には薬局や薬房の店名が記されているが、高村薬局・高村薬房は見当らない。『明治の富山をさぐる』には「（明治）三二年三月、山王町高村医院跡に、・・・共立医院を設けるまで・・・」とある（水間 1979）。この高村医院と高村薬口とに何らかの関連があつたのだろうか。



写真 3 「高村薬」銘入り
陶器瓶片

3 陶器瓶の产地

出土点数の多い富山城下町遺跡周辺の産地として推測される陶器窯は、越中瀬戸焼、越中丸山焼、小杉焼がある。

小矢部市五社遺跡出土の D 1 は越中丸山焼製との報告がある（県財団 1998）。一方、個人蔵の E 1 については、『富山県の陶磁器思考(1)』において小杉焼（四代）作と紹介されている（尾山 2004）（注 1）。

（1）越中丸山焼

富山市八尾町（旧婦負郡八尾町）丸山村の山本甚左衛門が京都の清水焼で陶技を学んだ後、尾張の陶工勇蔵と文政 13（1829）年あるいは天保元（1830）年頃開窯したとされる。富山藩は産業振興策のため援助し、嘉永頃磁器の焼成に成功している。安政（1858）年安政の大地震で打撃を受け、明治維新後藩の庇護を失い漸次衰退した。廃窯は明治 27 年とされる。

（2）小杉焼

文化 13（1816）年頃から明治 30 年頃まで四代に渡って焼き続けられた。初代与右衛門は相馬焼の技術を習得し、射水市（旧小杉町）へ帰って創窯した。天保年間には加賀藩から陶器所の免許を受け全盛期を迎えた。銅青磁とも言われる独特の銅緑釉や飴釉があり、瓢箪形徳利や鴨徳利、窓貫など酒器に名品が多い。文久 2（1862）年、陶山家を伝染病のコレラが襲い二代・三代の与右衛門が相次いで亡くなる。四代目三十郎は二代の弟で近代的な作品が多い。



写真 4 「福井病院」銘入り陶器瓶片

近年、この 3 窯出土の陶片を実見する機会があった。私見ではあるが、胎土の特徴から小杉焼あるいは越中丸山焼のいずれかと推測される（注 2）。

（3）その他（福井・三国焼）

一方、福井県坂井市の三国焼（かみやけやき）から出土した陶片にイッヂン掛けによる「福井病院」銘の薬瓶とされる陶器片が展示図

録（龍翔館 1987）にある（写真4）。現物は未確認であるが小瓶サイズとみられる。札場窯は明和5（1768）年、業を継いだ札場嘉右衛門が京焼を伝習し、旧窯を改良、三国駅前に窯を移した。19世紀に最盛期を迎える、明治29年に廃窯となった。「福井病院」は石川県富山病院と同時期に石川県福井病院として開設、その分病院が坂井港に設置された。

4 時代背景

近代以前の薬品容器にはその耐腐食性から主に陶磁器を用いていたと考えられていたが、薬品容器であったと特定できる考古資料は極めて限られていた（小川 2013）。江戸や長崎などの遺跡からは唐薬貿易に用いられた磁器の中国製小瓶が出土する例もある（堀内 2010）。

各地に病院が設置される前の江戸時代は、幕府の徹底した鎖国政策によって伝染病の流入が少ない時期であった。しかし、明治初期になってコレラの大流行が起こるなど、各地で伝染病に対する防疫がなされた。明治10年にはコレラ予防に関する布告、同11年にはジフテリア予防心得が出され、同12年には種痘法が公布された。同19年、京阪神での流行を受けて富山県でも検疫を強化するが、県西部で発病者が出て年末までに県内での死者が1万人を超えた。対策として消毒液や予防接種液が配布される。伝染隔離病舎である避病院の設置も時代背景として見過ごせない。またコレラだけでなく、天然痘・腸チフス・赤痢と伝染病の流行が度々起こっている（『富山県史』）。

5 陶器瓶の用途

陶器瓶という形状から、何らかの水溶性の内容物であったことが推測される。病院で扱われるものに、まず薬が挙げられる。小矢部市五社遺跡の陶器瓶は薬瓶として報告されていた。

しかし、病院から処方される薬品容器には内容量の目印となる目盛りが付されていることや内容物が分かるような透過性、変質を防ぐための密閉性が求められる。さらに長期保存のために遮光性が求められるものもある。当時の容器には、ガラス製が普及し始めており、県内でも明治6年から売薬の容器や病院で水薬を入れる薬瓶などに広くガラス製品が使用されるようになった（『富山県史』）。これには、透過性のある透明なガラス瓶や遮光性の高い褐色・紺色のガラス瓶などがある（注3）。明治9年『薬舗心得草』には薬品を貯蔵する方法が細かく示されていることから、既に明治前期から薬品の種類によって容器の細分化が図られていた。陶器製の容器という性質上、遮光性は確保できるが、透過性や密閉性にはやや難点がある。

平成27年度の旧総曲輪小学校跡地の発掘調査では、「富山病院」銘のあるガラス製の瓶が4点出土した（高さ7.0cm～7.5cm、口径1.5～1.7cm、底径3.0cm）。これは、先述した明治10～24年に所在した「富山病院」で使用されていた薬瓶である。このガラス製薬瓶の出土地点は「富山病院」があった場所に隣接している。加えて、明治40～42年にあった「日本赤十字社富山支部病院」と銘のあるガラス製の瓶（高さ8.2cm、口径1.6cm、底部長軸3.6cm、短軸2.5cm）も3点みつかった（図5・写真5）。

これらのガラス瓶は、「富山病院」や「日本赤十字社富山支部病院」の実在を物語る貴重な資料となるとともに、両病院ですでにガラス製の薬瓶が使用されていたことを裏付けた。薬をガラス瓶に保存するのは蘭学がもたらしたもので、ガラス瓶に入れて密封するということは西洋薬の普及を物語る。

その一方で、内容物は液体でなく丸薬や粉末状の薬や薬種であった可能性も否定できない。江戸時代には、丸薬や粉末の薬は紙に包装されるのが一般的であった。紙は薬の「氣」を守り、湿「氣」の侵入を防ぎ、薬の最適の梱包材料であった（服部 2010）。薬籠とも呼ばれる印籠の容器に入れられ携帯されていた。明治に入るとガラス瓶にも粉末などの個体物を入れることがあった。当時の西洋薬では湿気に不安定な粉末をガラス瓶に入れるのは一般的であ

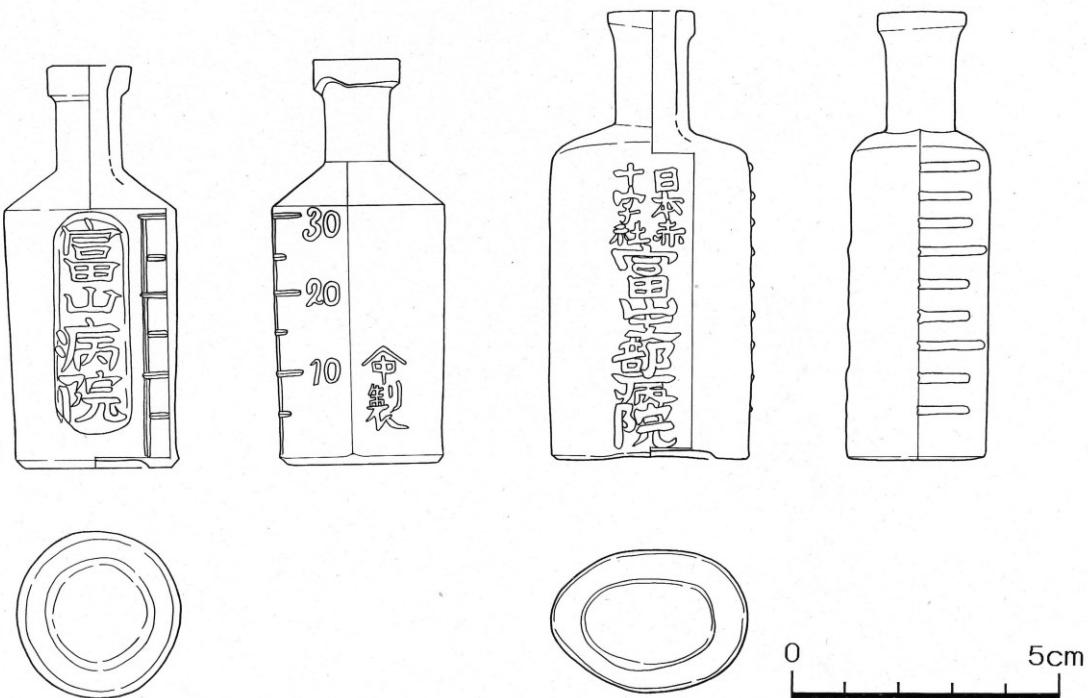


図5 ガラス製薬瓶実測図（左：「富山病院」右：「日本赤十字社富山支部病院」）



写真5 ガラス製薬瓶（左：「富山病院」右：「日本赤十字社富山支部病院」）

った。シーボルトはじめ長崎来訪者は粉末の医薬品をガラス瓶に入れて持ち込んでいた（服部 2015）。さらに前項で紹介したような時代背景から伝染病対策用としての用途も考えられる。消毒用の生理食塩水やアルコールの容器の可能性もある。現時点では、富山城下町遺跡から蘭引（らんびき）（写真6）などの蒸留器は出土していないが（注4）、蒸留水や傷口の洗浄用蒸留酒などの保管容器としての可能性もあるだろう。

6 「病院」銘入り陶器瓶の意義について

江戸時代、藩の重要な産業であった売薬業は、明治以来昭和6年まで鉱工業生産物の中で常に一位であった。明治初年の富山市内の売薬人は約2,800名と推測されている。旧藩士で売薬に転ずるもの



写真6 蘭引

高さ37cm（富山市売薬資料館蔵）

も増え、明治 20 年の富山町の人口は 51,302 人で、売薬関係者（製造、受売、行商）は、合計 4,442 人にのぼり、世帯数では 3 世帯に 1 世帯が売薬業に関わっていた（『富山市史』）。

文明開化、欧米化の風潮の中ではあるが、病院での治療費は決して安価ではなく、特に私立病院は名医の病院で治療費は高価であった。明治期の一般市民や貧困層への医療提供は江戸期に活躍した売薬人、薬業商や町の開業医が担当していた。

富山は売薬業が盛んな風土もあり、西洋薬や西洋の病院制度が普及しにくい背景もあったのではないか。そのような中、明治 4 年布達による「売薬取締規則」、同 7 年文部省による「医制」の制定、同 10 年太政官第七号で「売薬規則」が布告され、売薬への規制が強まる。伝統的和漢薬である売薬・薬種業が盛んな富山に、新たな感染症や疾病への対峙という課題に西洋薬を用いた西洋医学を浸透させるため、西洋式の「病院」からもたらされた内容物であることを P R する効果が求められていたとも推測される。

その一方で江戸時代、酒の販売に用いられた「通い徳利」のように、内容物を使い終えると容器の陶器瓶をまた病院に戻し、再び薬品などの容器として再利用される「通い薬瓶」なる利用の仕方も想定される。あるいは、酒店や薬局が病院用に酒などを販売した本来の「通り徳利」だったのだろうか。城下町遺跡で蘭引が見つかれば、酒店や薬局で蒸留された蒸留水や蒸留酒、焼酎を病院へ納品するための容器だったとも推測することができる。

実際の内容物について薬品か、蒸留水か、消毒液か、酒かの結論を導き出すことはできなかったが、「富山病院」銘のガラス製薬瓶の存在から、明治前期から薬瓶としてガラス製容器が使用されていることを確認でき、陶器瓶は薬瓶以外の用途の可能性が高くなつた。

「長谷川福光分病院」銘がある E 2 陶器瓶が使用されていた長谷川病院福光分院では、血清療法による治療が行われていた。血清はジフテリアなどの感染症の検査や治療に効果があった。長谷川病院創立者の医師・長谷川徳之は伝染病が頻発していた当時、防疫活動にも従事し、伝染病にも罹患したとの記録もあり（高井 2003）、毎年伏木町児童に無料で種痘を施すなど公衆衛生のために尽力していた（寺畠 1987）。この様な状況から、E 2 陶器瓶の用途を推測する手掛りが垣間見え、更には「病院」銘入り陶器瓶の用途の手掛りにもなるだろう。

富山城下町遺跡出土の「病院」銘入り陶器瓶は、「富山病院」の動向や陶器瓶の産地の操業期間から、明治 10~30 年の約 20 年の間に製作され使用されていたと推測される。その「病院」銘入り陶器瓶がなぜ県西部の五社遺跡で出土したのか。「富山病院」の様相を物語る資料に辿り着くことはできていないが、今回紹介した陶器瓶は、明治維新を経て伝染病の流行などの時代背景の中、医薬品の近代化や県内への西洋式病院システム導入期の実態を考古学的な視点から推測できる貴重な資料である。今後もこの陶器瓶に注目していきたい。

おわりに

本稿の作成に際して、稻垣裕美・浦畠奈津子・小川望・大野淳也・兼子心・酒井重洋・重松めぐみ・鈴木裕子・針山康雄・福永肇・堀内秀樹・松本外与次・山内賢一の各氏、越中小杉焼友の会・富山県埋蔵文化財センター・富山市郷土博物館・富山市立図書館の各機関からご教示や資料の実見・掲載などにご配慮いただいた。記して謝意を表したい。

注

- (1) 同書に小杉焼（四代）作として紹介された戦勝徳利（鴨徳利）が近年、小杉焼でない可能性が指摘された（2015『越中小杉焼友の会資料 第 11 号』）。E 1 陶器瓶も検証が必要だろう。
- (2) 小杉窯・越中丸山窯・越中瀬戸窯製品（碗）の胎土の特徴を示した（高木・鹿島 2016）。
- (3) 内藤記念くすり博物館の稻垣裕美氏、中富記念くすり博物館の重松めぐみ氏からご教示
- (4) 江戸加賀藩邸上屋敷東端（富山藩邸との境目付近）にて江戸期（19 世紀）の蘭引が出土し

年代	ことがら
江戸	
文化 13(1816)年	<u>小杉焼操業を開始する</u>
文政 12(1829)年	<u>越中丸山焼操業を開始する</u>
安政 5(1858)年	安政大地震
明治 元(1868)年	明治維新
9(1876)年	新川県が石川県に編入
10(1877)年	千石町加藤貞知邸に公立 <u>金沢病院</u> 富山分院仮設置
13(1880)年	石川県 <u>富山病院</u> と改称し現在の大手町に開設
14(1881)年	富山病院内に医学所設置
16(1883)年	伏木町(高岡)に長谷川病院(県下最初の私立病院)
17(1884)年	富山県設置
18(1885)年	福光町に <u>長谷川病院福光分院</u> 開設
22(1889)年	今石動町(小矢部)に石動病院開設
24(1891)年	上新川郡立富山病院が新婦 <u>富山病院</u> と改称
27(1894)年	津沢町(小矢部)に津沢病院開設
32(1899)年	この頃、富山城外堀が埋め立てられる
40(1907)年	新婦病院 <u>富山市立病院</u> として開業
	<u>越中丸山焼廃窯</u> 、30年頃 <u>小杉焼廃窯</u>
	富山市内大火、新婦病院焼失
	日本赤十字社富山支部病院が開設される

表2 富山県初期の病院と陶器窯の動向に関する年表

た(小川2014)。「病院」銘の陶器瓶はいずれも細身で、蘭引の注口からの受けに合う。

文献

- 赤祖父一知 1993 「「石川県富山病院・同医学所」について」『医譚』第64号
- 小川望 2013 「医療と衛生」『事典 江戸の暮らしの考古学』古泉弘編 吉川弘文館
- 小川祐司 2014 「加賀藩邸から出土した蘭引」『東京の遺跡』No.100 東京考古学談話会
- 太田雄寧 1876 『薬舗心得草』
- 小矢部市 1971 『小矢部市史 下巻』
- 尾山京三 2004 『富山県の陶磁器思考(1)「藩政時代～昭和終戦年代」』(株)シンクハウス
- 鹿島昌也 2015 「富山城下町遺跡出土「病院」銘入り徳利形陶器瓶の意義について」『日本考古学協会第81回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 金沢大学十全同窓会 2012 『金沢大学医学部創立百五十周年記念誌』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1998 『五社遺跡発掘調査報告書』
- 定塚武敏 1974 『越中の焼きもの』(株)巧玄出版
- 高井靖夫 2003 「県下初の私立病院創立者 長谷川徳之」『高岡の図書館』第69号
- 高木好美 鹿島昌也 2016 「富山城下町遺跡出土の流し掛け碗について」『富山市考古資料館紀要』第35号 富山市考古資料館
- 寺畠喜朔 1987 「長谷川徳之の事績と系譜」『医譚』復刻第55号
- 富山県 1981 『富山県史 通史編V近代上』
- 富山新聞社 2001 『ふるさと富山歴史館』
- 富山市 1987 『富山市史 通史 下巻』
- 内藤記念くすり博物館 1982 『目で見るくすりの博物誌』
- 内藤記念くすり博物館 2008 『くすりの夜明け～近代の薬品と看護』
- 中富記念くすり博物館 1999 『中富記念くすり博物館 展示案内』
- 中川喜久江 1971 「富山藩医学史」『富山史壇』50・51号合併号 越中史壇会
- 西田尚紀 1972 「石川県(金沢)病院および医学所」『金沢大学医学部百年史』
- 服部昭 2010 『印籠と薬一江戸時代の薬と包装』風詠社
- 服部昭 2015 『薬包装の近現代史』風詠社
- 福永肇 2014 『日本病院史』(株)ピラールプレス
- 福光町 1971 『福光町史 下巻』
- 堀内秀樹 2010 「近世の薬種需要と唐薬貿易」『南海を巡る考古学』同成社
- 水間直二 1979 『明治の富山をさぐる—総曲輪を中心として—』
- 龍翔館<三国町郷土資料館> 1987 『第6回 特別展「三国焼展」』